

-12月25日 総務事務集中化の問題で交渉-

システム第Ⅱ稼働で事務職員を集約

問題が発生した場合には県職労へ一報を

当局は速やかな対処と協議を約束

昨年末、12月25日に総務事務の集中化に対する交渉を行いました。総務事務を集約化させることによる、再配置や、削減に伴う職員の負担増や県民サービスの低下の懸念などを中心に当局の考え方を質しました。改革推進課は、「集約化に伴う総務担当職員は、一部地域機関を除いて地域振興センターまたは県税事務所に配置する。仕事の重点化により仕事量が増えないようにする。県民サービスにはニーズに対する重点配分を行うことにより、低下し

ないよう配慮する。」等の考え方を示して理解を求めました。県職労は、1月からのシステム第Ⅱ稼働及び職員集中化などに伴う、問題発生に対する速やかな対処と協議の保障を約束させ、あわせて、定数削減問題の更なる交渉継続を訴えて交渉を終えました。総務事務システム第二期稼働に伴う問題の発生時には、県職労へご連絡ください。当局に対応を迫ります。地域機関集約化の考え方は左表のとおりです。

| | |
|----------|------------------------------|
| 集約化の基本 | 地方(合同)庁舎の地域振興センター又は県税事務所に集約化 |
| 集約化しない機関 | 単独庁舎、川口・朝霞の地域機関、県土整備・下水道事務所 |

※ 元の事務所には総務担当職員は配置せず、集約化された総務担当職員の中で各事務所の専任担当を決定する。

自治体労働組合の重要な課題

貧困問題の解決方法

石田衣良さんの小説からの引用

『おれたちの世界はいつふたつに分かれてしまったのだろう？』

日のあたる場所と決して日のあたらぬ場所。南国の楽園の一步となりには、極寒の地獄。そこに住むのは、恵まれたごく少数と大多数の運の悪いやつらだ。それでも額に汗して働くことは尊いと、どこかの大企業の社長たちがテレビの記者会見でいう。だが、やつらの会社が乾いたタオルさえ絞り抜くりストラで業績を回復させたことは、工業高校卒のおれにだってわかるのだ。』

これは、石田衣良さんの小説「池袋ウエストゲートパークVII『ボーイズ戦争』(二〇〇七年七月)からの引用です。現在の若者をとんでもなく描いているシリーズです。二〇〇八年七月刊のシリーズ八作目「非正規レジスタンス」では、足を

のばして眠ることが夢だというネットカフェの住民である日雇い派遣の若者が登場します。この若者は「あきらめない。あきらめたら、そこで終わりだ。(中略)切れない。怒りを人にむけ

行動により社会を変える

年越し派遣村の活動が示したもの

二〇〇八年の年末から二〇〇九年の年始にかけて、報道の中心となったのは日比谷公園の年越し派遣村でした。村長を努めたのは湯浅誠氏(NPO法人「もやい」事務局長)で、「反貧困」という著作を、岩波新書で二〇〇八年四月に出しています。

湯浅氏は、日本政府の貧困状態に関する見解や「グローバルには極端な格差が大量にある」などという認識を否定し、「貧困の実態

てはいけない。今のぼくの生活は、すべてぼくに責任がある。」と自らの苦境を自己責任の結果として受け入れてしまうのです。小説はそこで終わらせない仕掛けがあつて、読者が喜べる結末が用意されていますが、現実の世界は果たして…。



解雇を扱った元日未明の「朝まで生テレビ」に、活動する仲間たち(河添誠首都圏青年ユニオン書記長ら)と一緒に出演しました。

派遣切りの窮状を訴えるだけでなく、政治が救済に乗り出さない現状が何を引き起こしているか指摘しました。正月休み中の厚生労働省の講堂の使用が認められ、休み明けには廃校となつた小学校等の一時利用が可能になりました。番組に出演した大村秀章氏(自民党衆議院議員、厚労副大臣)、猪瀬直樹氏(東京都副知事)を動かした結果でしょう。

湯浅氏や河添氏は、社会を変革するために行動することに確信を持っています。その確信が年越し派遣村への労組の垣根を越えた連合と全労連の支援、多くの市民ボランティアの参加を促し、行政も動かしました。

貧困問題を解決し公正な社会を建設することは、自治体の労組にとって重要な課題です。県職労も、解決に向けて確信を持って取組みたいと思います。そのためにも未加入の職員の皆さんの、私たちの活動への参加をお待ちしています。